研究ノート

接触場面における話順交替時のポーズについて

―中国人日本語話者と日本語母語話者の 2 者間会話に関する研究ノート―

村　岡　英　裕

1　はじめに

本稿では、中国人日本語話者と日本語母語話者の会話をとりあげ、話順交替時のポーズの発生とその調整プロセスの分析を試みる。

中国語母語話者と日本語母語話者とは、しばしば欧米諸言語の話者と比較して、コミュニケーション・システムに類似した部分が少なくないと言われる。あいづちの頻度、微笑み、フィラーの頻度など、英語話者の場合と比べて、相対的に日本語母語話者に近いことが指摘されている（cf. ファン 1998）。

しかし、両者のシステムが近いということはただちに問題が少ないということにはならない。類似している場合には、接触場面の参加者は、相手のシステムとの相違を前提にするのではなく、自分の母語コミュニケーション・システムの規範に基づいて解釈し、評価する傾向があるため、より細かな相違が大きな逸脱として評価される。このことは、異なる英語バラエティ間のコミュニケーション（Gumperz 1982）においても指摘されているし、上級日本語話者と日本語母語話者のコミュニケーションにおいても問題として強調されている。

準母語話者と言ってもよい日本語に流暢な中国人日本語話者と日本語母語話者の間でも、さまざまなコミュニケーション上の問題が考えられる。稿者の観察や周辺の声を聞いても、日本語母語話者側からは中国人日本語話者は相手の話を聞かない、勝手に話す、自分の意見を強く主張しすぎるといった

評価が少なくない。一方、中国人日本語話者側からは、日本語母語話者について話題が狭すぎる、友達のような深い話が出来ない、気を遣ってくれるがやりすぎだ、などの感想を聞くことがある。

本稿では、中国人日本語話者（以下、中国人話者）と日本語母語話者（以下、日本人話者）のインターアクションの諸相の調査の手始めとして、ポーズの発生を取り上げる。ポーズには発話行為としての意図的なポーズ、発話生成や発話理解において生じるポーズなどもあるが、本稿では話し手が交替する時点で生じる非意図的なポーズに注目し、その発生の文脈と、発生後の調整のプロセスを取り上げ、少数の会話データをもとに仮説の産出を試みたい。なお、本稿では分析のためのデータ数も少ないため研究ノートとして公開する。

2　日本語における話順交替

考察の対象とするポーズの発生は、日本語による接触場面会話の現象であり、日本語母語場面会話の規範が基底規範となっている。本節では日本語における会話システムにおいて議論されることが少ない２つの点について考察を加えたい。

日本語における会話システム、とくに話順交替システムについて考える上で重要なキーワードは２つある。１つは、話順（turn）を構成する話順構成単位（Turn Construction Unit）の性格と、それに基づく移行適格場（transition relevant place）の実際、２つ目はTCUと関連して生じる話順とフロアー（floor）の交替のメカニズム、である。

Sacks, Schegloff, and Jefferson（1974）から出発した話順交替規則の研究においては、話順構成単位を統辞的に捉え、句、節、文などが話順を構成することが可能であるとしている。しかし、複数の言語における話順交替を対照したFord and Thompson（1996）が主張するように、話順構成単位は統辞的完了（syntactic completion）によって構成されるだけでなく、イントネーションによる完了（intonational completion）、そして語用論的完了（pragmatic completion）によっても構成される。

Ford and Thompson（1996）の英語の分析結果と日本語の自然会話のおける話順交替とを比較したTanaka（1999）は、英語の話順交替が上の２つ以上の完了が重なる地点で話順交替が実現される（complex transition relevant place）のに対して、日本語の話順交替はむしろ語用論的完了において実現される傾向があると指摘した。結果としてどのような話順交替が見られるかと言うと、英語においてはあるまとまった内容があり、イントネーション、機能の完了とともに文として完了した段階で話順が交替されるが、日本語においては単語やその一部であっても会話的に機能していれば話順は交替しうることになる。つまり、英語に比べて日本語の場合には話順交替の単位がより短いことになる。さらに、日本語においてさまざまな機能的、語用論的な単位が話順交替の移行適切場を形成するということは、会話参加者による移行適格場の予測projectabilityが難しく、判断が遅れる傾向があることも示唆する。

一方、複数人数の会話場面を対象としたEdelsky（1981）やHayashi（1991）は、話順と区別して発話権ないしフロアー（floor）の概念を提出し、相互作用の中で参加者によって心理的な時間・空間として認められたものがあるとして、単なる話している時の話順（turn at speaking）とフロアーを持ったときの話順（turn at holding a floor）との違いに注目している。英語においては、２名の会話の場合には先述したように話順自体がまとまった内容を収めることが出来る程度に長めであるために単なる話順とフロアーを保持した話順との区別が明瞭にならない。しかし、複数の参加者による会話ではある話題の発話権を所持することが認められたフロアー保持者の話順と、その場でフロアーに係わりながら発言をする他の人の話順とが区別できるわけである。たとえば、フロアー保持者は、発言をしなくても、フロアーを保持することが可能である。

Edelsky（1981）やHayashi（1991）とはべつに、村岡（2003）は彼らのフロアー概念が日本語による２名の会話の特徴を理解する上でも有効であることを示唆している。機能的、語用論的な単位によって話順交替が繰り返される傾向がある日本語の会話においては、まとまった話の内容を１つの話順に収めることが難しく、複数の話順にまたがって１つの話題が開始さ

れ、終結されていく。

このことは次の例[1]によっても明らかであろう。これは友人同士の20代前半の男性二人による会話の一部である。ここではBが9歳上の兄との微妙な関係についてまとまった話をしている。

話順48でBは、相手の話に応答した（「それはないわ」）後、短いポーズ（#）と開始シグナル（「ただね．なんかね」）によってフロアーを開始するが、すぐに句末を長音化することによって（「ここのつうえだとー」）、相手Aのあいづちを要求している。Bは同様にしてさらに話題を続け、話順52で「だからむい＾しきのうちにこわいんだよ」と一応の話題の完了をしている。このようにフロアーは、複数の話順を管理することによって、言い換えれば、ローカルな会話参加を管理することによって維持されるわけである。

つまり、それぞれの話順の上位にフロアーが設定されることになり、フロアーを認知し、共有した参加者は、フロアー保持者とフロアー非保持者として会話に参加していく。フロアー非保持者は、聞き手の会話参加のあり方として関心を持たれてきた短いあいづち、ないしバックチャンネル・フィードバックだけでなく、質問、要約、共感の表明、からかいなどの実質的発話（杉戸1989）によってもフロアーの維持に貢献する。またフロアー保持者は、相手にそうした実質的発話を要求することで相手をフロアー非保持者として位置づけ、自分のフロアーの維持をはかる。日本語のいわゆる共話（水谷1993）的な性格は、以上のような機能的、語用論的な単位によって交替する話順と、話題によって設定され維持されるフロアーによって説明することが可能である。

48　B　それはないわ†‖＞#ただね．＞なんかね．＞べつにな＾かわるいわけじゃないんだけどー#＞こう#あれじゃん．ここのつうえだとー＞

49　A　うん†≫

50　B　おれなんかものごころついてな＾いときに＾．こわれちゃったんだよ＞‖ほらちゅうがくせいのあれるじきじきに［xx］†＞

51　A　あーあ†≫

52　B　だからむい＾しきのうちにこわいんだよ†‖≫

53　A　あーなるほどね†‖≫

54　B　ね＃＞で．にばんめのば．あにきのときは＾‖＞おれもこっちもなんか．ものごころついてたからーあこわかったけど＾‖＞．まだいじょうぶ†‖＞（笑い）まトラウマだね†‖＞＃ていうことがあにきにしられたらかなしくだろうなー†‖≫（笑［い)］

こうした会話システムに１つ問題があるとすれば、日本語の会話を子細に眺めても今のところフロアーの完了の地点が言語的に明らかではないことであろう。つまり、たとえ１つの話順が完了したとしても、話し手は依然としてフロアーを保持していると理解しているかもしれないのである。したがって、聞き手は現在の話し手のフロアーの完了を予測することが難しいために、すぐに自分のフロアーを開始することに躊躇することになる。結果として、聞き手は、フロアーの交替を試みず聞き手としての参加の姿勢を変えないか、フロアーの交替を目指して終結のシグナルや非言語的なフィラーによる交渉を開始するかのどちらかを選択することになる。いずれにしても新たなフロアーの開始は、遅れることになるわけである。

上の例でも、Ｂによる話順52での完了は、説明の終了という語用論的な完了のみならず、終助詞「よ」による統辞的完了、下降調によるイントネーションの完了によっても示されており、話順交替の決定的な位置となっていると言えよう。しかし、それまで聞き手であったＡは実質的発話（「あーなるほどね」）を発するだけで、フロアーを開始していない（話順53)。Ｂはそこで話順54でフロアーを再開し、付加情報や自己解釈などを試みたわけである。以上の話順52から54までの連鎖においては、理論的にはフロアーの交替が可能なのにもかかわらず、それは起きていないし、またその起きなかったことが話順交替システムからの逸脱であったという証拠も見つけることは出来ない。つまり、ここでのＡの実質的発話は完全に妥当な応答であり、日本語の会話においてはこのようにしてフロアーの交替は遅れていくのだと思われる。

英語などの会話交替システムに比べると、以上のような特徴を持つと思わ

れる日本語の話順交替においては、移行適格場に関する判断が遅れやすいこともあってポーズが許容されやすく、またフロアーの完了がわかりにくいことから話題の転換がゆっくりしていると言えそうである。

3　調査の枠組み

3．1　データ

本稿のもととなるデータは稿者が学部、大学院授業の一環として収集してきたビデオ・データのうち、準日本語母語話者のレベルにある20代の中国人話者５名（C1～C5）と20代の日本人話者５名（J1～J5）による、それぞれ15分の１対１の会話である。 会話は個室で会話参加者二人きりで行われ、ビデオカメラを三脚で固定して録画を行った。それぞれのペアは親疎の差はあるが、初対面ないし顔見知り程度の関係である。会話に際しては自由に話すように指示した。録画された会話は、マルチメディア・ソフトのQuick Time Player 7.0にて処理し、Quick Time Playerを再生しながら分析を行った。重要な箇所については文字化資料を作成した。

3．2　本稿で扱う話順交替時のポーズ

Sacks, Schegloff and Jefferson（1974）（以下、SSJ）では、規範志向的な話順交替規則を提案している。その普遍性については議論があるが、接触場面会話のように逸脱が生じやすい場合には規範が強く意識されることが多いため、現在でも有効なモデルであると思われる。SSJの話順交替規則からポーズが生じる場合を考えると、少なくとも次の３つの場合がありうる。

⑴　現在の話し手が話順を譲渡したが、次の話し手が話順を取らない、または話順の取得が遅れる。

⑵　現在の話し手が話順を終結したが、次の話し手が話順を取らない。

⑶　現在の話し手が話順を終結し、かつ次の話し手が話順を取らない場合に、現在の話し手が話順を継続のために再取得しない、あるいは再取得が遅れる。

接触場面会話において、⑴の典型的な場合は、現在の話し手が質問などに

よって相手に話順を譲渡した場合に、理解や発話生成のために時間がかかり、次の話し手が話順を取得するのに遅れたり、躊躇したりする場合である。本稿では、会話システムの相違に基づくポーズに焦点をあてるため、⑵、⑶を対象にする。

3．3　ポーズ事例の会話構造

上の⑵、⑶においてポーズが生じた場合に、SSJに基づけば話順の再取得による会話再開の第１候補は現在の話し手となるはずである。しかし、日本語の会話システムの場合には「現在の話し手」の定義は明瞭ではない。問題は主として２点ある。

問題１：現在の話し手（current　speaker）は、フロアー保持者としての話し手か、あるいはフロアーを保持していない話し手も含まれるかが不明である。とくに、日本語の会話においては、話題を持った話し手（フロアー保持者）が話順を終結させた後に、聞き手がフロアーを持たないまま実質的発話を行うことが少なからず見られるが、その場合にどちらの場合でも現在の話し手として機能することが可能であるように思われる。

問題２：日本語などの会話システムにおいては、非言語的、非語彙的なマーカーが多用される。つまり、問題１で挙げたフロアー保持者としての話順終結と実質的発話の話順終結に加えて、とくに話順交替が一時的に停滞する場合には、それらの終結後に複数のマーカーが現れることが少なくない（話順回避に際してのマーカーについてはSSJにも指摘がある）。こうしたマーカーは、現在の話し手としての資格をもち、SSJの規則のために機能しうるか、あるいはシグナルとして会話再開に作用するかが明らかではない。

以上のような話順交替における基礎的な問題点を踏まえて、本稿では予備的に次のように会話構造をとらえ、考察の範囲を以下のように定める。

⑴　フロアー保持の終結としての話順終結（FTC, Floor–Turn Closing）

⑵　フロアーを持たない話順終結（TC, Turn–Closing）

⑶　マーカー（marker）：実質的な意味を持たないマーカーとして以下の４つを区別する。

　　ａ．現在の話し手による話順終結マーカー（marker–c）

b．参加者双方による話順継続の促しマーカー（marker-con）

c．フィラー（marker-f）

d．次の話し手による話順取得マーカー（marker-u）

⑷　話順開始（TO, Turn-Opening）

なお、フロアー保持の話順終結の判定は難しいが、本稿では直前までまとまった内容の話をしている場合として分析していくこととする。また、フロアーを持たない話順終結では実質的発話や、短い応答を含める。まとめると、ポーズが生じた会話において、現在の話順が終結し、次の話順が開始されるまでには、話順取得をめぐって上の３種類の話順および４種類のマーカーをやりとりしながら、言い換えれば、話順およびマーカーを遡及的リソースとしながら交渉が行われていると考えられる。

５組の会話の概要を述べると、日本人話者は第２節で述べた日本語の話順交替システムを基底規範として会話を進めていた。超上級にあたる中国人話者は会話において２種類の対応を場合に応じて実施していたように思われる。１つは、日本語の話順交替システムをもとに実質的発話を行っていく対応で、日本人話者がフロアーを持って発話した時に観察された。つまり、中国人話者は日本語の話順交替システムを習得し、単にバックチャンネル・フィードバックを送るだけでなく話順を取りながら実質的発話を繰り出していた。もう１つは、積極的に話題を提供していくことで会話を進めていくストラテジーである。日本人話者によるフロアーの交替は比較的にゆっくりとすすむため、話題の展開も緩慢な印象がある。中国人話者は会話を進めるために日本人話者の話題を展開させるような質問を行ったり、新しい話題を提供する様子が顕著に見られた。以上のような中国人話者の対応によって、全体として会話はスムースに流れていったと言うことができる。

以下、第４節ではポーズ事例の会話構造を示し、第５節ではポーズ直前の要素に注目してどのようなプロセスによってポーズが生じ、また話順の開始が行われたかを分析する。

4　ポーズ事例の会話構造の分析

話順終結後に生じたポーズ事例は31件であった。この31件について、(a)話順終結直前のフロアーの保持者（Foor)、(b)非フロアー話順が後続しなかった場合のフロアー終結者（FTC)、(c)フロアー終結後に後続した非フロアー話順の終結者（TC)、(d)マーカー発話者（markers)、(e)話順の開始者（TO)、についてまとめたのが次の表１である。TCおよびTOで同時１件とあるが、それぞれを数えたため、フロアー31件に対してTOは32件となっている。

表１からわかる主な特徴は以下の通りである。

(1)　ポーズが生じた31件のうち、中国人話者がフロアーを保持していた件数は日本人話者の３倍にのぼる（C23件、Ｊ８件)。

(2)　フロアーを保持しない実質的発話による話順終結（TC）では、21件中、日本人話者が16件で、中国人話者の３倍以上となっている。

(3)　話順終結後のマーカー43件では、中国人話者が28件、日本人話者が15件で、３分の２を中国人話者が発していた（表２、３も参考のこと)。

(4)　話順の開始をみると、中国人話者が18件、日本人話者が14件で顕著な差はなかった。

次にそれぞれの要素の連鎖を表したのが表２と表３である。表２は日本人話者がフロアー保持者であった場合の８件、表３は中国人話者がフロアー保持者であった場合の23件、についてそれぞれ連鎖を見ている。

（フロアー保持話順とTC話順）

表１：ポーズ事例の会話における発話傾向

	C	J	合　計	備　考
Floor	23（74.2%）	8（25.8%）	31	
FTC	7（63.6%）	4（36.4%）	11	
TC	5（23.8%）	16（76.2%）	21	（同時１件）
markers	28（65.1%）	15（34.9%）	43	
TO	18（56.3%）	14（43.7%）	32	（同時１件）

表２：日本人話者がフロアー保持者であったポーズの会話連鎖

Floor	FTC	TC	markers	TO
J：8	J：4		C：5	C：4
			J：0	J：0
		C：4	C：4	C：3
			J：5	J：1

表３：中国人話者がフロアー保持者であったポーズの会話連鎖

Floor	FTC	TC	markers	TO
C：23	C：7		C：4	C：2
			J：9	J：5
		J：15	C：15	C：8
			J：1	J：8
		C/J：1	C：0	C：1
			J：0	J：0

表１におけるフロアー保持の話順件数とTCによる実質的発話の話順件数とは、相補的な関係にある。表２を見ると、中国人話者の場合には、相手日本人話者がFTCで終結した後、話順を取らない話順回避は４件、TCによる終結は４件であった。しかし、表３の日本人話者の場合には話順回避が７件あるものの、TCによる終結は16件（同時の場合を含める）を数える。つまり、ポーズの多くは、中国人話者がフロアーを持ってまとまった話をした後で、日本人話者が実質的な発話で応答した場合に、よく起きていたと言える。先に会話を概観したときに、日本人話者がフロアーを保持した時には、中国人話者は実質的発話によって対応し、また会話を進めるために中国人話者は積極的に話題提供を行っていたことを述べた。表１に見られるポーズ事例は、会話の概観で触れなかった中国人話者がフロアーを保持していた場合にあたるわけである。

（マーカー）

話順終結後のマーカー43件では、中国人話者が28件、日本人話者が15件

で、3分の2を中国人話者が発していた。

FTCの後にTCによる後続がない場合を見ると、FTCの相手側がマーカーを多く発する傾向があり（中国人話者のFTC後には、マーカーの件数は中国人話者が4件、日本人話者が9件であり、日本人話者のFTC後には、マーカーの件数は中国人話者が5件、日本人話者が0件となっている）、マーカーの使用は相対的に類似している。

しかし、TCが後続した場合を見ると、中国人話者のFTC後、日本人話者がTCで終結させた場合、マーカー16件中、15件は中国人話者が発していた。逆に日本人話者のFTC後に中国人話者がTCで終結させた場合には、マーカー件数はほぼ同数である。つまり、日本人話者のTCによる終結後、会話維持はもっぱら中国人話者によって果たされていたことがわかる。

このことは、FTC後のTCを話順として見なすかどうかが中国人話者と日本人話者において評価が異なっていたことを示唆していると思われるが、子細は次節に譲る。

（話順の開始）

表1で最終的な話順の開始をみると、中国人話者が18件、日本人話者が14件で顕著な差はなかった。表2と表3で連鎖を見ると、FTC後、TCが後続しなかった場合には、その相手側が話順を開始する傾向が見られる。中国人話者のFTC後の話順開始件数は中国人話者が2件、日本人話者が5件であった。また、日本人話者のFTC後は中国人話者が4件、日本人話者が0件であった。SSJの規則では現在の話し手によって話順が終結し、その他の参加者が話順を取らない場合、現在の話し手が話順を開始するとされるが、本データでは逆に話順が交替している。これはFTC後に現れたマーカーが話順交替に作用した結果と考えなければならない。

また、FTC後にTCが後続した場合は複雑である。中国人話者のFTC後に日本人話者がTCで対応した場合に、開始は中国人話者、日本人話者ともに同数である。逆に日本人話者のFTC後に中国人話者がTCで対応した場合には、開始は中国人話者が3件、日本人話者が1件のみで、中国人話者のほうが多い。これらの結果からすると、話順開始はSSJルールの重複適用（FTCまたはTCを可及的リソースとしている）の結果か、マーカーによる

交渉の結果か、いずれにしてもより複雑なプロセスが生じていたと考えられる。

5　ポーズの発生要因と話順開始の分析

第５節では、ポーズの発生要因をポーズ直前の要素に注目して分析し、話順の開始との関連を探る。以下、5．1でフロアー終結後にTCが後続しない場合を、5．2でTCが後続した場合で、中国人話者がフロアー終結をした場合を、5．3で日本人話者がフロアー終結をした場合を論じることとする。

5．1　フロアー終結（FTC）後、話順（TC）が後続しない場合

FTCの終結後、TCが後続しなかった場合は、中国人話者のFTCで７例、日本人話者のFTCで４例であった。このとき、ポーズがどこで起きたかを見ると次の表４、表５のようになる。

表４、５では件数が少ないので傾向とまではいかないが、考えられる要因を示唆する。FTC直後にポーズが生じた場合(中国人話者FTC後が２件、日本人話者FTC後が２件）は、どちらも、話し手側が相手の話順取得を期待したのにもかかわらず、聞き手側でFTCかどうかの判断が遅れたか、判断がつかずに待機した場合と考えられる。

マーカー後にポーズが生じた場合も見ると、１例を除いて、⑴FTCの相

表４：中国人話者のFTC後、TCが後続しない場合のポーズ直前の要素

FTC	沈黙直前の要素	C	J	話順開始
C：7	FTC	2	0	J：1
	marker-f	0	3	J：3
	marker-con	0	2	C：2
	marker-c	1	0	J：1

（FTC直後のポーズ２例のうち、１例ではポーズ発生後、後続したマーカーの後にさらにポーズが発生したため、その場合の話順開始はmarker-f後のポーズの場合の開始として計算している）

表５：日本人話者のFTC後、TCが後続しない場合のポーズ直前の要素

FTC	沈黙直前の要素	C	J	話順開始
J：4	FTC	0	2	C：2
	marker–f	1	0	C：1
	marker–con	1	0	C：1
	marker–c	0	0	NA

手側がマーカーを出している、⑵そのマーカーを出した直後にポーズが生じていることがわかる。これらの観察から次のような交渉プロセスが推定される。

A．marker–fおよびmarker–conの場合

（ｉ） マーカーのうち、 marker–fとmarker–conは聞き手側が発しており、聞き手側は話し手のFTCがいまだ完了したとは認めていないことを示している。

（ii） にもかかわらず、マーカー直後にポーズが生じたということは、さらにFTCをした話し手がフロアー維持ないし再開を望まなかったか維持ないし再開する準備がなかったかのどちらかであったことを示唆する。

（iiia） その結果、話し手ではなくmarker–fを発した聞き手が話順を取得し、開始した。

（iiib） しかし、聞き手がmarker–conを発した場合には、聞き手が日本人話者のときは中国人話者が再開をし、聞き手が中国人話者の場合にもフロアー終結をした日本人話者ではなく、中国人話者が話順を開始している。

B．marker–cの場合

（ｉ） 話し手側が発したmarker–cの場合には、話し手側がFTCを再告知している。

（ii） その直後にポーズが生じたということは、聞き手側でmarker–cの認知が遅れたか、話順を開始する準備ができていなかったことを示唆する。

（iii） 結果として、聞き手側が話順を開始したことを考えると、（ii）のどちらかであったと思われる。

ここではA（ⅲb）の例として、日本人話者がFTC終結を行い、中国人話者がmarker-conを発した例を示す。右端には会話構造の構成要素の分析を加えた。

この会話例１では、日本人話者J4が旅行で海に行った時の話を終結した後（１:24)、中国人話者C4はとくに何も言わず、相手の笑いによる終結シグナルに笑いによって答えている。つまり、C4は継続マーカーを出したわけである（１:26)。J4は発話を開始せず、直後にポーズが発生している（１:28)。ポーズの直後に、C4は話順取得マーカーをだし、話順を開始した（１:30)。おそらく、FTCを再度、参照することにより、次の話者を自己選択したと考えられる。

会話例１

１:11	C4	じゃうみとかは＾	
１:12	J4	うみ、も、いっかいちらっと	
１:14	C4	あ	
１:15	J4	よるいったくらいで［ほんとうに	
１:16	C4	［あー、わたしおよげないからいってもxx	
１:20	J4	いやもうなみうちぎわでダッシュですよ	
１:21	C4	えーうそーわたしぜんぜんそんな	
１:24	J4	テトラポットとかちょうよじのぼって	
		ました（laugh）	FTC
１:26	C4	(laugh)	con-marker
１:28	＃		pause
１:29	C4	xxx（小さい声）	u-marker
１:30	C4	みずに、いっかいおぼれたことがあって＾	TO

数が少ないため明瞭には言えないわけであるが、（ⅲb）の場合、中国人話者はポーズに対して話順維持ないし話順取得によって迅速に反応している印象があり、ポーズに対する許容度の低さを示唆しているように思われる。

5．2　中国人話者のフロアー終結（FTC）後、話順終結（TC）が後続した場合

中国人話者のFTC後、日本人話者は15件の実質的発話によるTCを行った。ポーズの直前の要素を見ると表６のようになる。

5.2.1　TC直後のポーズと話順の開始

中国人話者がFTCで終結した場合に、日本人話者によるTC直後、４件でポーズが生じている。

（ｉ）　FTC終結をした中国人話者から見ると、日本人話者が実質的発話であるTCで終わらず、続けてフロアーを開始することを期待したと思われる。一方、聞き手としてTCを発した日本人話者は、TCをいわばあいづちとして発したのであり、話順を開始する準備はなかったと考えられる。

（ⅱa）　結果として、４件中、３件では聞き手としてTCを発した日本人話者が話順を開始した。つまり、日本人話者は自分のTCを話順として再認することで、話し手の位置に移動し、SSJ⑵の規則に従って、話順を再取得したと解釈される。

（ⅱb）　一方で、４件中、１件では中国人話者が開始している。中国人話者は相手のTCを話順からあいづち的なものへと「降格」させることで、再度、自分を話し手の位置に戻し、同じSSJ⑵を使って、話順を再開したと解釈できる。

表６：中国人話者FTCに日本人話者TCが後続した場合のポーズ直前の要素

FTC	TC	沈黙直前の要素	C	J	話順開始	
					C	J
C：16	J：15	TC	0	4	1	3
		marker−f	3	1	4	0
		marker−c	7	0	3	5
	C/J：1	TC	1	1	1	0

（marker−cの例で、話順開始のうちC、J同時の場合が１例あり、C、Jともに開始として数えた）

次の会話例２は、（ⅱa）の場合である。

会話例２

9：13	J2	ちゅうごくはどこもそう＾じしんはこないの＾	
9：16	C2	＃こないとおもう（laugh）	
9：17	J2	あ、うらやましい（laugh）	
9：19	C2	なんとなくじしんがあまりこないの	
9：22	J2	あー	
9：23	C2	うーん＃＃＃こない	FTC
9：33	J2	うーん	TC
9：34	＃		pause
9：37	J2	なんかおれのすんでるところも	
		マンションの６かいだから	TO

会話例２では、中国では地震が起きないという話が終結した９分23秒では、C2は「うーん＃＃＃こない」と話順内で３秒以上の長いポーズを使い、下降イントネーションおよび声量を下げて発話しており、話順終結を複数のシグナルで明示している。それに対して、J2はさらにあいづちを述べて受けるだけであった。この会話のJ2は他の日本人話者に比べてゆっくり話す傾向があったが、直後にさらに３秒のポーズが生じている（９：34）。C2のFTC終結が明らかになり、ポーズが生じたことに対して、J2は自分のあいづちによってすでに話順は交替しており、ポーズ後に誰も話順を取得しない場合には依然として自分に話順があることを遡及的に判断したと思われる。

5.2.2　marker-f後のポーズと話順の開始

日本人話者がTCを発し、その後にmarker-fが発話された直後にポーズが生じた場合が４件あった。中国人話者の場合が３件、日本人話者の場合が１件である。

（ⅰ）　日本人話者の１件については相手の中国人話者が継続しないことを予期してmarker-fを発した可能性がある。

（ⅱ）　逆に、中国人話者の場合には、日本人話者のTCが話順開始につながらず、そのまま継続されない恐れがあることを予期してmarker-fを発し

た可能性が考えられる。つまり、（ⅰ）、（ⅱ）では会話維持ないしポーズ回避のための事前調整としてmarker-fが発せられたのではないかと思われる。

（ⅲ） marker-fの直後にポーズが生じたということは、marker-fがどちらの参加者から発せられた場合にも、その相手側が、marker-fの発話者が話順を開始するだろうと期待した結果であるかもしれない。他方、marker-fの発話者は会話維持ないしポーズ回避のために発話したのであって、その後の事態に注意を払ってはいないように思われる。

（ⅳ） 中国人話者がmarker-fを発した場合、その直後に生じたポーズは（ⅱ）での事前調整の前提となる、「TCを行った日本人話者が話順を開始しないかもしれない」という予測が正しかったことを示していると確認したために、中国人話者は話順を再開したと解釈できるだろう。

（ⅴ） 日本人話者がmarker-fを発した１件では、（ⅰ）の事前調整があった場合でも中国人話者のように日本人話者は話順を開始していない。この１件は従って話順ならびにマーカーによる交渉からは説明できない。

会話例３は（ⅴ）の例である。

会話例３

3：46	C5	なんかだいがくで４ねんかん、あのー ごろごろしてたから、いますごくいそ いでるらしくて	
3：54	J5	うんうん	
3：56	C5	いもうととして	
3：57	J5	うん	
3：59	C5	なんにもしてあげられないんですよ	FTC
4：02	J5	あやさしいですよ	TC
4：03	C5	laughいやー＃うん	f-marker; c-marker;
4：06	J5	ううん	f-marker
4：07	＃		pause
4：11	C5	うーん	u-marker
4：12	C5	いもうとはいまこうこうですか＾	TO

会話例３では、C5は中国にいる兄の就職活動がうまくいっていない話をしてFTC終結をした（３:59)。J5は実質的発話でTC終結をしたあと（４:02)、C5がフィラーと終結マーカー、J5がフィラーを１回ずつ発したところでポーズが生じている（４:07)。C5は、自分が終結マーカーをはっきりと伝えており、相手がフィラーを発しているところから、話順は相手に交替したと理解したと思われる。にもかかわらず相手が話順を開始しないため、会話維持のためにフィラーを発し、話順を再取得した（４:12）と考えられる。

J5が話順を取得しなかったことに関しては、この後、「沈黙とかきらいですか」と発言しているところからも、J5は初対面の準実験場面に対する違和感などもあって話順維持を必ずしも優先しない規範を採用していた可能性がある。いずれにしても、この例でも中国人話者の会話維持に対する志向が明瞭に現れている。

5.2.3　marker-c後のポーズと話順の開始

中国人話者のmarker-c７件は、FTCの後の話順終結シグナルであり、話順再開の意思がないことを示そうとした場合である。

（ⅰ）　このとき、日本人話者はTCを行った後でもあり、marker-cを話順終結の再確認として理解したと思われる。

（ⅱ）　また、７件すべての例でマーカーはポーズ直前の１回しか発話されていず、中国人話者もFTCを明瞭に表そうとしたと解釈することが可能である。

（ⅲ）　つまり、中国人側は話し手として話順の終結を伝えて会話維持に努めないことを示し、日本人側もまたその意図を理解したが話順取得の準備ができていなかったために生じたポーズであったと思われる。

（ⅳ）　話順終結シグナルであるmarker-cの後、話順開始は相手側になるはずであるが、７件中、日本人話者によって話順が開始されたのは５件に留まった。３件は中国人話者が開始している。中国人話者がポーズを許容できずに話順を再開したか、日本人話者の話順開始の傾向が低いことを予測して、話順再開を行ったかは明らかではない。

表７：日本人話者のFTCに中国人語話者のTCが後続した場合のポーズ直前の要素

FTC	TC	沈黙直前の要素	C	J	話順開始	
					C	J
J：4	C：4	TC	0	0	0	0
		marker-f	3	0	2	1
		marker-c	0	1	1	0

5．3　日本人話者のFTC後、話順終結（TC）が後続した場合

日本人話者がFTCを行った後、中国人話者が実質的発話でTCを行った４件では、その直後にポーズが現れた例はなく、すべてマーカーの後に現れていた。

5．3．1　marker-c直後のポーズと話順の開始

中国人話者のTC後、日本人話者がmarker-cを発話した直後にポーズが生じた例が１件ある。

（ｉ）　日本人話者はフロアー終結を再告知し、中国人話者も明瞭なmarker-cを理解したと思われる。

（ii）　中国人話者は話順を自己選択しなかったというよりも、話順を開始する準備ができていなかったためにポーズが生じたと思われる。

（iii）　そのため、準備ができたところで、中国人話者は話順を開始した。

5．3．2　marker-f直後のポーズと話順開始

残り３件は、まず中国人話者がTCを行うとともに、marker-fを発話した直後にポーズが起きていた。しかし、３件ともマーカーの交渉は複雑である。

（ｉ）　中国人話者がTCを行った後、日本人話者はmarker-cでフロアー終結を再告知しており、それに対して中国人話者がmarker-fを発している。

（ii）　日本人話者はmarker-cを発話した後、相手がmarker-fを発したために、話順は相手側に移動したと考えた可能性がある。

（iii）　中国人話者はそれに対して(a)話順開始の準備ができていなかったた

めに、あるいは(b)すでにTCを行っていることから改めて話順開始をすることに消極的であったために、話順を開始せず、ポーズが生じたと思われる。

（iva）　marker-fを発話した中国人話者が２件で話順を開始した。

次の会話例４は（iva）の例である。J3がこの会話録画日の朝、グアム旅行から帰ったばかりであり、そこでの体験を話している。C3からの質問（３:39）に答えることで、J3はFTC終結を行い（３:42)、C3は「そうですか＃へー」とTC終結を行った。その後、J3、C3ともにマーカーを出したところでポーズが生じている（３:47)。ポーズ後、まずJ3がフィラーを発したが、次に重なるようにC3が話順取得マーカーを出し、そのまま話順を再開した。ここではJ3が話順開始をしてもおかしくない。C3の話順の自己選択の理由には２つの可能性がありそうである。１つはFTC終結まで遡って、次の話し手として自分を規定した。もう１つの可能性は、C3はポーズ直前のマーカーを出した話し手であるため、ポーズ後に相手が話順取得を行わないのを見て、話順取得を選択したことである。どちらにしても、C3はこの会話で唯一の長いポーズ発生に対して会話維持のためにマーカーを発し、かつ新しい話題を提供する話順再開を実施している。

会話例４

２:32	J3	あついけどなんかすごいたのしかった	
２:35	C3	あっー	
３:36	J3	うみがすごいきれいだった	
３:37	C3	いいですね	
３:38	J3	うーん	
３:39	C3	あーしゃしんもいっぱいとってきました＾	
３:42	J3	しゃしんとってきた（laugh）	FTC
３:43	C3	（laugh）そうですか＃へー	TC
３:45	J3	うん	c-marker
３:46	C3	うーん	f-marker
３:47	＃		pause
３:49	J3	うん［(laugh)	f-marker
３:50	C3	［(laugh)	u-marker

3：51	C3	このごろ、えーと、せんしゅうか、 せんしゅうのどようび	TO

（ⅳb）　1件では日本人話者が話順を再開始した。これについて話順交替からは説明ができない。

（ⅳb）の例について見てみる。この会話例5では、ポーズが2秒にわたっており、中国人話者の話順回避を確認した日本人話者が話順を開始した場合と考えられるが、それ以上に会話維持に対する態度の相違が明瞭に見られる。J5の話順再開始の発言（4：30）は会話に対するメタ会話となっており、何かの逸脱が生じていたために、調整を行おうとしたと考えるのが自然であろう。

それまで先の会話例3でもわかるように、C5は相手に対する質問などで話題提供を行ったりしていたわけであるが、ここでは進めることができなくなっている。それでもC5はフィラーを発しており（4：26）、その表情から会話維持の方略を考えようとしていることが観察された（C5はやや顔をうつむき加減にして考えている様子をした）。その懸命さがJ5の話順の開始を引き出したと思われる。この推測が正しいとすれば、J5は会話維持に失敗したように思われるC5に対して、メタ会話的な質問によって、助けを出したと解釈することが可能である。

会話例5

4：12	C5	いもうとはいまこうこうですか＾	
4：44	J5	そうですねこうこうやめて、で、あの ー、つうしんきょういくですか、あれ をやってるみたいですね	FTC
4：23	C5	あー	con–marker
4：23	J5	うーん	c–marker
4：24	C5	そうなんですか	TC
4：25	J5	うん	c–marker
4：26	C5	うーん	f–marker
4：27	＃		pause
4：30	J5	むごんとかあんますきじゃないですか＾	TO

6　考察とまとめ

ポーズが生じた会話構造には非対称性が存在していたことが明白である。つまり、ポーズの多くは、中国人話者がフロアーを終結し、日本人話者が実質的発話で話順を終結した場合であること、会話維持のためのマーカーの多くを中国人話者が出していること、そして中国人話者がフロアーを終結したにもかかわらず、再度話順を取得していることなど、中国人話者が日本人話者よりも会話維持、会話展開に積極的だったことを示している。

一方、ポーズの発生と話順の再開のミクロな交渉には合理的なルールによる話順交替が行われていたことも特徴的であった。日本人話者に会話維持に対する消極的姿勢、中国人話者に積極的姿勢がやや目立ったとしても、話順の開始では日本人話者と中国人話者とで大きな差がでなかったと言える。前節までのミクロなレベルにおけるポーズの発生と話順開始のパターンは以下の４つのタイプに分かれた。

ポーズ直前の要素の連鎖	話順の開始者
FTC	＞FTCの相手側が話順開始
FTC＋TC	＞TCを出した話し手が話順開始
(FTC)＋(TC)*＋marker-f	＞marker-fを出した話し手が話順開始 ((　)*は選択的)
FTC＋TC＋marker-c/con	＞marker-c/conの相手側が話順開始

（ポーズの発生について）

FTCの直後、またはFTC＋TCの直後では、それぞれFTC保持者の相手側が話順を取らなかったために生じたポーズと考えられるだろう。つまり、中国人話者はFTC＋FTCを期待する一方で、日本人話者はFTC＋TCを期待していた。双方の期待が異なり、連鎖の第２部分が現れなかったためにポーズが生じたと思われる。

marker-c/conの直後のポーズについては、相手側がシグナルを認知し、話順を開始するまでに、時間がかかった可能性がある。一方、marker-fの直後のポーズではその発話者が話順を開始するために必要な時間であると同時に相手側が話順開始を待つ時間でもあったと思われる。

（話順の開始について）

話順の開始においては、言語管理（Neustupny　1994）的な意味での調整プロセスが会話参加者によって実行されていたと思われる。

マーカーが発話されない場合には、日本人話者側ではポーズの直前の話順（TC）が遡及的リソースとなり、つぎの話し手が選択される。中国人話者側ではTCを話順と見なさないことによって自分のFTCを可及的リソースとしていた。TCを話順と見なすかどうかによって、SSJの規則(3)の適用対象に相違が見られた。

マーカーが発話された際には、話順よりもポーズの直前のマーカーの機能によって次の話し手が選択される。つまり、marker-fを出した話し手が話順を取得する一方、marker-c/conを出した話し手の相手が話順を取得することになる。

ただし、どのような場合にも日本人話者はマーカーも少なく、ルールに反して話順を開始した例は非常に少なかった。中国人話者は逆にmarker-fも多く出し、ルールに反して話順を開始した例が見られ、規則だけでなく、意識的な管理も働いていただろうと思われる。

中国人話者には会話維持の関心の高さが示唆される。同時に、中国人話者には日本人話者との会話の経験が多々あり、日本人話者が実質的発話だけで終結させたり、フロアー終結後には話順を再開始しない傾向があることに気づいており、マーカーによってその場その場の会話維持を実施していたということもありそうである。

日本人話者については会話維持を相手に任せる傾向が示唆され、これは日本人話者の接触場面の言語ホスト・ストラテジー（Fan 1994）とも関わりそうである。

（接触場面性の影響）

上のような言語管理による調整は、接触場面においては増幅される傾向がある（cf. 李　2001）。中国人話者は母語場面以上にポーズを回避し、FTCを生成しようとするのに対して、日本人話者もまたポーズをより許容し、FTによるゲスト支援という日本人話者の規範を拡大していくように思われる。こうした傾向が、事前調整として実施された結果なのか、それとも相互作用

の中で互いの行動傾向が認知され、事後調整的に実施された結果なのか、については今後の課題としたい。

最後になるが、ポーズは、日本人話者がフロアーを保持した直後よりも、中国人話者がフロアーを保持した直後のほうがより多く生じていた。このことは、超上級の中国人話者にとっても話し手としての会話参加は、聞き手のそれに比べて困難であったことに起因するように思われる。話し手としての会話参加パターンが終結したと考えた直後に、パターンが崩れてしまった結果として、ポーズが生じたと考えたい。本稿ではそこから、話順交替時のポーズが発生するプロセスと話順の開始について考察し、両言語における会話システムの相違を指摘するとともに、会話維持のための調整が実施されていることも示唆した。もとより実証からはほど遠く、考察も可能性を示唆するに留まる。今後、適切な規模のデータを収集し、実証的に検討を重ねていくつもりである。

注１　ここでは統語的完了を†、イントネーションの完了を‖、ローカルな語用論的完了を＞、グローバルな語用論的完了を＞＞で区切っている。また、その他の会話例で共通な文字化の規則としては、短いポーズを＃、イントネーションの強調を＾、稿者の注記を（　）で、話順間の重なりを［　］で、不明箇所を［xxx］で示す。

参考文献

Edelsky, C. (1981) Who's got the floor？ *Language in Society*, 10, pp. 283–421.

Fan, S.K.C. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13–3, pp. 237–252.

ファン、S.K. (1998)「英語母語話者と中国語母語話者の点火ストラテジーについて―日本語学習者としての誘い」『日本語・日本文化研究』第５号　京都外国語大学　35–49頁

Ford, C.E. and Thompson, S.A. (1996) Interaction units in conversation: Syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns. In Ochs,

E., Schegloff, E.A., and Thompson, S.A. (eds.) (1996) *Interaction and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 134–88.

Gumperz, J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hayashi, R. (1991) *Cognition, empathy, and interaction: Floor management of English and Japanese conversation*. Norwood: NJ: Ablex.

李善雅 (2001)「議論の場における言語行動―日本語母語話者と韓国人学習者の相違」『日本語教育』111号　36–45頁

水谷信子 (1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学』 4 月号　4–10頁

村岡英裕(2003)「アクティビティと学習者の参加」宮崎里司、ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育』明治書院　245–260頁

Neustupný, J.V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan–Terry, J. (ed.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution*. Singapore: Academic Press, pp. 50–69.

Sacks, H., Schegloff, E.A. and Jefferson, G.A. (1974) Simplest systems for the organization of turn–taking for conversation, *Language*, Vol. 50. no. 4, pp. 696–735.

杉戸清樹 (1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち」『日本語教育』67号　48–59頁

Tanaka, H. (1999) *Turn–taking in Japanese conversation: A study in grammar and interaction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.